

〔 シンポジウム趣旨説明 〕

中 澤 達 哉

(福井大学)

近年のヨーロッパ史研究では、「近代国家」の前史としての「近世国家」像が批判され、近世ヨーロッパの各地で保たれていた独特な政治秩序の多様な姿が議論の対象となっています。ブリテンやスペインなどを事例に検討されてきた複合国家 (composite state) 論や複合王政 (composite monarchy) 論は、こうした議論の一端に位置付けられるものであり、中世後期に独特な政治体系と近代以降の国家経営との間のミッシングリンクを明らかにする分析枠として注目されています。複合国家を構成する様々な地域は戦争などの状況を背景に生み出される政治的な磁場によって引力や斥力を帯び、複合国家は不断にその編成を替えていきます。

さて、ではなぜこのような新たな近世史観が生まれてきたのでしょうか。オックスフォード大学のロバート・エヴァンズ教授の言葉を借りれば、これには1960年代の歴史学における巨大な地殻変動が少なからず影響しているでしょう。周知の通り、1960年代後半からの後期産業社会に対応して出現したポストモダニズムは、近代歴史学の客観性や科学性を保証してきた実証主義を拒否し、歴史記述の不可能性をも主張しました。この事態は、1960年代を境に、近代国民国家のみならず、市民社会、人権、啓蒙、産業社会、近代化などの近代的諸価値に対する信仰が幻想に変わり衰退しはじめたことと軌を一にしています。近代国民国家の正統化のために半ば体制化されていた近代歴史学も、必然的に変容を迫られることになったわけですから。

このような背景の下、ポストモダニズムによる地殻変動は、近世史研究にも大幅な認識の転換あるいは方法論上の進化を迫ることになります。例えば、1970年代以降のヨーロッパの歴史学界では、アナール派と同程度に、G・エストライヒ (G. Oestreich) の「社会的紀律化」(Sozialdisziplinierung)、W・ラインハルト (W. Reinhard) らの「宗派化」(Konfessionalisierung)、J・ポーコック (J. Pocock) らの「市民的人文主義」(civic humanism)・「共和政」(republicanism) 研究、そして、K・H・ケーニヒスバーガ (H. G. Koenigsberger) およびJ・エリオット (J. H. Elliot) らを中心とする「複合国家」(composite state)・「複合王政」(composite monarchy) 論が大いなる発展を遂げました。アナール派のインパクトが日本では強いだけに、とすると、複合国家論や複合王政論の重要性は比較的軽視されがちであったように思いますが、複合国家研究の史学史上の意義は、近代という時代を規定してきた「国民国家」観を相対化させたという点できわめて大きいといえます。ここで重要なのは、ケーニヒスバーガやエリオットらの複合国家・複合王政論は、近代国家、市民社会、人権、啓蒙、産業社会、近代化などといった近代的諸価値への信仰が潰えた1960年代末のポストモダニズム的な状況に対する、近世史家による反応であったということです。ケーニヒスバーガおよびエリオットの反応は、主権国家 (sovereign state) に関する議論の再構成による近世国家研究からの反応でありました。同様にポーコックは共和主義研究からの転回でした。「宗派化」「紀律化」研究も広くはその延長線上にある議論として捉えることができるでしょう。このように、日本における社会史の発展とは異なる多様な動きが同時期のヨーロッパにはみられたのです。

さて、「複合国家」とはケーニヒスバーガが1975年に提唱した国家概念です。彼によれば、近世の国家

は中央集権的な国家ではなく、複合的な国家形態をもち、また、身分制議会などの中世以来の政治形態を保存した国家のことでした。つまり君主は国家全体を絶対主義的に統治できないのであり、支配下の様々な地域との「交渉」「妥協」「調停」を通じて緩やかに統治していたのです。この状態を表す概念として、ケーニヒスバーガが多用した史料用語が *dominium politicum et regale* です。

ケーニヒスバーガの論点を引き継いだのがエリオットの「複合王政」論です。彼は、中世とは異なる、しかも絶対主義とも異なる、主権を持った新たな国家・政体に着目し、近世君主の支配領域の多くが、古来の法と権利を持つ独立した国家ないしは政体の「集合体」であったと論じました。実際に、君主または王朝間の連合は、スペイン王国、グレートブリテン王国、ポーランド＝リトアニア共和国、ハプスブルク帝国などに顕著にみられる現象です。近世ヨーロッパは実のところ、中央集権的な主権国家からなるのではなく、服属するさまざまな地域との合意のもと緩やかな統治を行う主権国家あるいは政体の集合体であり、そうした国家のほうがむしろヨーロッパでは常態であったとの主張でした。

こうした「複合国家」「複合王政」論の延長線上に位置するのが、「礫岩国家」(conglomerate state) 論です。「礫岩国家」とは、スウェーデンの歴史家 H・グスタフソン (H.Gustafsson) がおもに提唱した概念です。彼によれば、近世国家の君主の支配領域に所属する各地域は、中世以来の伝統的な地域独自の法・権利・行政制度を根拠に、君主に対して地域独特の接合関係をもって礫岩のように集合していました。Conglomerate とは「礫」を含む堆積岩を意味する地質学用語であり、非均質で可塑性のある集合体ということになります。グスタフソンの貢献は、ケーニヒスバーガおよびエリオットの複合国家・複合王政論がやや静態的であるのに対して、服属地域の「組替」「離脱」のほか、国家の「解体」を視野に入れた考察を行い、動態的な国家論を提示したことです。礫岩国家論は君主とこれに服属する複数の地域（または領邦）との間に、集合のあり方に関する複数の複雑な交渉が常に存在することを重視しています。それゆえ、礫岩国家的編成は、戦争など国家の存亡にかかわるような危機的な非常事態に明示的に現れるのです。つまり、礫岩国家論は、危機の際に復古であれ連合であれ統合であれ解体であれ、どのような形態をとるにせよ、常に服属地域（礫）が組替えられたり離脱したり変形することを前提としています。この服属地域（礫）の可塑性・可変性こそ礫岩国家の特徴といえます。

以上のように、従来の古典的な「主権国家の凝集性・集権力」という認識と、これと対立する「礫岩国家の集塊性」とは、近世ヨーロッパを検証する際の二律背反的な像であり指標といえましょう。とはいえ、近世史像を形作ってきた前者の「主権国家の凝集性」という「型」は、今日では複合国家論・複合王政論・礫岩国家論のほか、私の専門とする東欧史研究の分野でも社団国家 (corporate state) 論や小複合国家 (small composite state) 論によって批判されています。

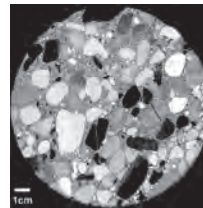
さて、このシンポジウムは、こうした可塑性をもつ政治秩序のあり方を地質学用語の礫岩に準えながら「礫岩国家」と呼び、ダイナミックな変動に着目しながら、複合的な国家編成の特徴を明らかにします。「礫岩」のような政治秩序は、近世ヨーロッパに普遍的な現象として確認できるものです。しかし、このシンポジウムでは、統合や解体をうんだコンテクストの違いに着目することで、それぞれの「礫岩国家」がどのような個性、どのようなローカリティ (locality) を育んだのかに目を向けたいと思います。まず現在のフランス歴史学界にあって複合国家研究の第一人者である J.-F. ショーブ氏からイベロ・アメリカにおける複合国家の変動について講演を頂きます。その後、日本の3人の歴史家がコメンテーターとなり、イベロ・アメリカ、ドナウ・バルカン、北東ヨーロッパにおける政治秩序の事例をつきあわせめます。オスマンに対峙したドナウ・バルカン側からみたコメントを広島修道大学の河野淳さんから、ローマ・カトリック

世界の内奥に位置しながらロシアやタタールなどとも対峙したポーランド・リトアニアからのコメントを京都大学の小山哲さんから、イベロ・アメリカ世界の複合国家についてイベリア半島側の知見にもとづいたコメントを上智大学の内村俊太さんから頂きます。「礫岩国家」という現象は近世ヨーロッパに普遍的に確認できるものですが、このシンポジウムでは、そうした「三点測量」の作業を通じて、地域によって異なる個性を明らかにできれば幸いです。

シンポジウム 礫岩国家の三点測量 趣旨説明

中澤達哉（福井大学）
2014年4月12日
早稲田大学国際会議場

「礫岩」とは？



[http://en.wikipedia.org/wiki/Conglomerate_\(geology\)](http://en.wikipedia.org/wiki/Conglomerate_(geology)) <http://geology.com/rocks/conglomerate.shtml>

「礫岩」的な神聖ローマ帝国



http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/a/a0/HRR_1400.png

「礫岩」的なハプスブルク支配域



http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/8/8e/Growth_of_Habsburg_territories.jpg

「礫岩」的なハプスブルク支配域



Sebastian Münster, *Cosmographia Universalis* (Basel, 1550)
<http://www.swaen.com/antique-map-of.php?id=12387>

主要参考文献

Koenigsberger, H. G., *Dominium Regale or Dominium Politicum et Regale: Monarchies and Parliaments in Early Modern Europe: Inaugural Lecture in the Chair of History at University of London King's College 25th February 1975*, London, 1975, pp. 1-28.

Elliot, J. H., "A Europe of Composite Monarchies", *Past and Present*, 137, 1992, pp. 48-71.

Gustafsson, H., "The Conglomerate State: A Perspective on State Formation in Early Modern Europe", *Scandinavian Journal of History*, 23, 1998, pp. 189-213.

Pálffy, G., *The Kingdom of Hungary and the Habsburg Monarchy in the 16th Century*, Budapest, 2009.